

子どもの本や、子どもの読書活動の県内外の情報をお届けします！

山梨県子ども読書支援センター(県立図書館内) TEL 055-255-1040 <http://www.lib.pref.yamanashi.jp/>

★県外ニュース 「ぐりとぐら」がてんじ(点字)つきさわる絵本に！

子ども達に大人気のロングセラー絵本『ぐりとぐら』の、点字つきさわる絵本が発売されました！様々に工夫されたその特徴をお伝えします。



『てんじつきさわるえほん りとぐら』 中川李枝子作 大村百合子絵 福音館書店

特徴1 さわってわかる絵の形、さわって読める文字(点字)

絵(触図)と文字(点字)が、透明な樹脂インクで盛り上げて印刷されています。

特徴2 絵が違う？ 位置も変えてある？

さわった時にわかりやすい形、手ざわりになるよう、絵を少し変え、位置を移動しています。例えば、ぐりの服は縞模様に。では、ぐらの服は？確かめてみましょう。

特徴3 大きな文字

見えにくい人にも読みやすくするため、通常の絵本より、大きな文字で印刷されています。形もくっきりしています。

※参考 福音館書店ホームページ http://www.fukuinkan.co.jp/detail_page/978-4-8340-8038-4.html、

点字つき絵本の出版と普及を考える会「点字つき絵本さわる絵本リスト」<http://homepage1.nifty.com/fbunko/tenjihon/index.htm>



『赤毛のアン』
L・M・モンゴメリ作
村岡花子訳 講談社
(講談社青い鳥文庫)

★県内ニュース

NHK 朝ドラ「花子とアン」

『赤毛のアン』ってどんな本？

3月31日から放映されるNHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」。タイトルの「アン」とは、山梨生まれの村岡花子が日本に初めて翻訳紹介した本『赤毛のアン』の主人公の名前。ドラマの重要なポイントになるこの作品の情報をお伝えします。

●作者は誰？

カナダ東部のプリンス・エドワード島生まれのルーシー・モード・モンゴメリ(1874-1942)。1歳9ヶ月で母親と死別し祖父母に養育されます。教師、新聞社校正係として勤務し『赤毛のアン』の出版で一躍有名に。その後結婚し、牧師の妻、母親、作家として活躍しました。

●『赤毛のアン』はどんな本？

主人公は孤児院から年老いた兄妹に引き取られた赤毛の少女アン。想像力が豊かでおしゃべりなアンが前向きに様々なことにチャレンジし、失敗を乗り越え、賢く素晴らしい若者に成長するまでを描きます。

1908(明治41)年に出版され、ベストセラーに。映画や舞台になった他、世界各国で翻訳され、今なお、児童文学の名作として読み継がれています。

●村岡花子と『赤毛のアン』

花子は女学校で宣教師達からカナダの文化や教育を学び得意の英語を活かして翻訳家に。太平洋戦争前、帰国する元同僚の宣教師から友情の記念に『赤毛のアン』の原書を贈られます。花子は危険を冒して翻訳を進め、戦後(1952、昭和27年)に出版。「その流麗な文章によって描き出される独立心とユーモアにあふれるアン姿に人々はたちまち魅了された。」(『図説児童文学翻訳大事典第1巻』大空社)と高い評価を得ました。

※参考文献 『アンのかげ』村岡恵理著 マガジンハウス、『たのしく読める英米児童文学』本多英明他編著 ミネルヴァ書房

●○ 活動紹介 ●○ ママ、パパ、読んで！「絵本親子感想ノート」の力

青葉幼稚園

豊かな心と言葉を育てることを目的に、子どもと本との出会いを大切にしている甲斐市の学校法人鷹野学園 青葉幼稚園。図書室にはなんと、専任の先生がおられます。いったい、どんな取り組みをしているのでしょうか？ 園の読書活動について、鷹野秀樹園長と図書室の丸山典代先生からお話を伺いました。

●○ 青葉幼稚園ではなぜ読書活動に力を？ ●○

子ども達の言葉を育てるためです。言葉は想像力を養い、その力は人の立場になって考える力につながります。読めば読む程、疑似体験ができ、心も人生も豊かになります。主な読書活動として図書室にあおば文庫（約 1,700 冊の本）を整備し、専任の先生をお願いし、読み聞かせや家庭への本の貸出をしています。



だるまちゃんの絵が描かれた「絵本親子感想ノート」を紹介する鷹野園長

●○ 図書室の先生の仕事とは？ ●○

主な仕事は、読み聞かせ、家庭に貸出する本選びと貸出返却手続き、毎年約 30 冊買う本の選定、図書の装備や整理です。図書室の本は、字の多さなどを目安に5つのレベルに分け、子どもにわかるように棚板に色を付け、本の背にも同じ色シールを貼り区別しています。貸出などは、本にバーコードを貼り、パソコンで管理しています。

●○ 毎朝、読み聞かせ？ ●○

毎朝、学年別に読み聞かせをします。担当は鷹野園長、丸山先生と事務の先生。担当が家庭からの連絡帳を見る時間を使い、10時10分から20分まで10分間です。「声を出す」ことも言葉の力になると考え、論語などの暗唱もします。年少児では、動き回ってしまう子いますが、耳から聞いているので他の子の邪魔をしない限りは注意しません。だんだん集中力が付き、きちんと聞けるようになります。

●○ 読み聞かせの本の選び方は？ ●○

運動会などの行事や季節に合わせて選び、時間内に収まる長さのものにします。丸山先生が何冊かセレクトした中から選ぶことも。大型絵本はイベントなどでは使いますが、朝の読み聞かせでは使いません。

●○ 読み聞かせのおすすめ本は？ ●○

『きょだいなきやだいな』（長谷川摂子作 降矢なな絵 福音館書店）です。今の季節は『十二支のおはなし』（内田 麟太郎文 山本孝絵 岩崎書店）。



1人づつノートのコメントを基に本の話した後、本の貸出手続きをする年長児と丸山先生

●○ 独自の取り組み「絵本親子感想ノート」とは？ ●○

週1回、金曜日に子ども達に1冊ずつ本を貸出し、土日を含み、翌週の火曜日に返却してもらいます。読んだ取り組みを形にしたものが、読書記録「絵本親子感想ノート」です。最初は書名や○△×の記入でしたが、絵を描く欄、子どもや保護者のコメント欄を追加し工夫しました。担任と丸山先生が目を通しています。

記録はファイルに綴り、卒園時に贈ります。年少児から順に見ていくと、だんだん形ある絵になり、感想もしっかり書くなど、子ども達の成長が目に見えます。3年間読み続けたトータルは約700冊になります。

卒園後、小学生になっても本をよく読む、感想文が書けるなど、考えたことを言葉にできる子が育ち「やってもらってよかった」との感想も。ずっと読み続け、本好きになってもらいたいです。

●○ 保護者からの反応は？ ●○

まずは絵本を家庭に持って帰ってもらい、保護者から読んでもらうという活動です。年少児は短く簡単に読める本を選び、ノートに書名と著者名だけは必ず記入してもらい、読み聞かせを働きかけます。読んだ内容の絵を描くことを楽しむ子が多いです。パパが絵本を読む係！という家もあります。時には、じいじ・ばあも。絵本親子感想ノートから、家庭でどのように本を楽しんでいるか様子が伝わってきます。

●○ 貸出する本を、年長児の2学期（10月頃）までは丸山先生が選ぶ理由は？ ●○

子どもはやさしい本や図鑑など好きな本に偏りがち。読み継がれた本（『スイミー』（レオ・レオニ作 谷川俊太郎訳 好学社）や『どうぞのいす』（香山美子作 柿本幸造絵 ひさかたチャイルド）など）も読んでほしいと考えています。選ぶ楽しみも知ってほしいと、年長児の3学期は好きな本を選んでもらいます。人気の本は『へんしんトンネル』（あきやま ただし作・絵 金の星社）です。『もりのほんやさん』（舟崎靖子作 舟崎克彦絵 偕成社）シリーズも好きな子がいて、毎年1人は全部制覇する子がいます。